

卷之三

THE KANKO WORKS A SHIMMUN

本社 TEL:02-8825 東京都新宿区神楽坂5-37 高井戸西3番
TEL:03-3267-4841 FA:03-3267-4842
関西 TEL:06-52047 西日本 中央区 下山手通5-1-1 TEI:078-347-5298 FA:078-361-1050

3月15日
2005年
(平成17年)
第531号

An illustration of a small tree with a textured trunk and a cluster of green leaves at the top. Four speech bubbles are attached to the tree's branches, each containing a different Japanese character: 'さ' (sa), 'よ' (yo), 'は' (ha), and 'じ' (ji). The background behind the tree is a light blue gradient.

ローラ・オーエンズ展を見る

2月22日、日曜日の遅い午後
開催中のギャラリーを訪れてみ
た。十人ほどの若い女性が熱心に
鑑賞中。同行の女性の感想も「良
かかった」と喜んでくる。日本で
もむしろ人気が出ている作家だ。
静謐な地下空間こそこの作家の
世界に浸るいいやうわしい。洞窟か
ら出てきて空を飛び回るコウモ
リ、樹上でクロウの親子が周囲
を睡眠している。ピスタチオグリ
ーンの壁に鈍い光を放っている満
月、蜘蛛の巣で獲物を待つ蜘蛛、
とけけ面の奇妙な猫たち、闇夜に
何か考えてくるやうにつぶやく木
鳥、首飾りをつけた牡鹿は運んで
いる。そのやうな作品がいかに
らえた。彼女の発表場所しかわ
しいのは、なぜかよく聞く事がた

場所がないから。」
「ベルコ」在住の作家カースティ
・ベル氏によるとオーワンスの会
話が紹介されている。
「新しく絵画をつくる私の私
の最大の目標は、それまでの私が
自らを閉じこめていた場所で、自
分自身に小さな（または大きな）
自由を新たに与えてみるしかもられ
ない感じでいる」
絵画制作の目標は新しい自由を
獲得すること。作品展示は絵画の
現在の探索だ。彼らの。この
彼女の考え方は、作品のすべてを
「無題」にするなど、思ふの半
分以上は達成しきっている。

絵の具、クロージング、染み込み、エアーブラッシュ等が用いられる限りの素材と手法を駆使する。キャンバスが持つ可能性の枠を最大限まで広げた自由な作品世界だ。森糸羅萬象を視覚的形に投影できる類まれなる才能の持ち主でなければなし得ない技だ。

彼女の絵を見ていると、回転すし墨で皿に乗って流れてくる鮭ねだ群を想起する。トロ、イカ、納豆巻き、これがねじらしそうだ。海の幸などはいつも胸に持っているが、今はそれそれが好みのものしか口に運ばない。オーバンズの絵もまた鑑賞者に挑戦しているのである。すべてを理解しようとすれば裏切りのありに違いない。それで、すべてを歴史として切り替える者は、まるでじぶんする覚悟が必要だ。

現代アートはハッピレスな実験の果てに、希薄な作品が氾濫してしまっている。彼女の場合は常に驚きにつながるもう一つ仕掛けを作り続けられるかというかにかかるところである。彼女の生きずじこは生涯見て続けていく実験イヤノードなのだ。その理由はおそらくアートによる癒し、魂の救済を画しているためなのだ。

全作品「無題」を賞く理由

ローラ・オーエンズさんの日本初個展が二月八日より三月二十七日まで、東京・銀座の資生堂ギャラリーで開かれている。未発表作品を含む二十五点が展示されていた。彼女は1970年オハイオ州ユーリクリッジ生まれ、デザイン学校、美術学校で学び、最終学歴は1994年カリフォルニア・インスティチュート・オブ・アーツ修了課程修了。

2003年現在、ロサンゼルスに住んでいる。この地にある現代美術館で史上最年少での個展を開催した画家として触れ込みで注目を浴びた。卒業してすぐの94年から毎年のように作品を発表し続けていて、主なグループ展23回、個展23回。

場所だらけの。ぐるぐる在住の作家カースティ・ペル氏によるオーディスの会話が紹介されている。

「新しい絵画をつくるひとの私の最大の目標は、それまでに私が自らを閉じこめていた場所で、自分自身にぐるが（おれは大きな）自由を新たに手に入れたからかもしれないと感じている」

絵画制作の目標は新しい自由を獲得するといふ。作品展示は絵画の現在の探索だ、ということだ。この彼女の考え方は、作品のすべてを「無題」にするなど、思ひの半分以上は達成されないところであつて

絵の具、クロージング、染み込み、エアーブラッシュ等が用いられる限りの素材と手法を駆使する。キャンバスが持つ可能性の枠を最大限まで広げた自由な作品世界だ。森糸羅萬象を視覚的形に投影できる類まれなる才能の持ち主でなければなし得ない技だ。

彼女の絵を見ていると、回転すし墨で皿に乗って流れてくる鮭ねだ群を想起する。トロ、イカ、納豆巻き、これがねじらしそうだ。海の幸などはいつも胸に持っているが、今はそれそれが好みのものしか口に運ばない。オーバンズの絵もまた鑑賞者に挑戦しているのである。すべてを理解しようとすれば裏切りのありに違いない。それで、すべてを放りこむといひする者は、まるでじぶん愛する覚悟が必要だ。

現代アートはハッピレスな実験の果てに、希薄な作品が氾濫してしまっている。彼女の場合は常に驚きにつながるもう一つ仕掛けを作り続けられるかというかにかかるところである。彼女の生きずじこは生涯見て続けていく実験イヤノードなのだ。その理由はおそらくアートによる癒し、魂の救済を画しているためなのだ。